

イングランドから 北海沿岸文化を訪ねよう

ヴァイキングの歩みとともに

[新連載]
第1回

アングロ・スキャンディナヴィア文化の痕跡

カンブリアの教区教会(1) 伊藤 盡 Ito Tsukusu (信州大学准教授)



広い牧草地や海まで見渡せる墓地からの眺め

この墓地に毎日花を供えに来る老人は「わしの倅 (bairn) は日本軍と戦った」と語った

旅のはじまり

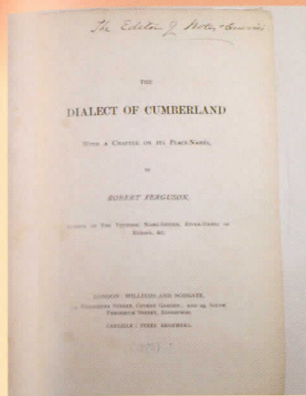
北海沿岸で活躍したヴァイキングの足跡を訪ねよう。北海沿岸と聞くと、なんだか極北の地という感じもするが、実はイングランド自体、北海沿岸地域に属し、同じブリテン島のスコットランドからオークニー諸島、シェトランド諸島を経て、フェロー諸島からアイスランドに至る極北への玄関口になっている。もっとも、8世紀から11世紀初頭に北海をまたにかけて活躍したヴァイキングたちは、その経路を逆に南下してイングランドに至ったのではあるが……。

湖水地方のあるカンブリアについて

2011年4月より本誌の巻頭に連載された北野佐久子先生の「ポターと巡る湖水地方の12か月」は、読者の記憶にまだ新しいところだろう。湖水地方を中心に置くカンブリア地方の生活文化が色鮮やかに紹介されていた。けれど、美しい景色やピエトリクス・ポターの描く可愛らしい動物、豊かな食文化が育まれた土地に、人間同士の血なまぐさい戦い

とその後の融和があったということは、あまり知られていない事実だと思う。まして、イングランド人気質にあふれるポターの作品の背景となる地域で、こともあろうに北欧の神話や英雄伝説が信奉されていたと聞けば、疑念を抱く読者もいるだろう。

けれど、カンブリアの方言に北欧語から継承された日常語彙が数多く残っている事実からは、イングランドという英語文化圏「総本山」の文化的多様性を知ることができる。たとえば、カンブリアのある教会の墓地で出会った1人の老人は、私と話すときに標準語を用いようとされながら、つい 'my child' と言うつもりが、'my bairn' 「わしの倅が」という言葉遣いをした。これは「子」を意味する古北欧語 barn に由来する方言なのだ。他にも例を挙げれば1冊の本が書けるほどだが、特に地名には数多くの北欧語が使われている。西カンブリアにある Thackthwaite などはその典型だ。この地名には古北欧語が使われており、thack は標準英語の thatch 「屋根を葺く物」と同じ意味を持ちながら、ch[t] ではなく ck[k] という音が発音される。これこそ古英語由来の



Robert Ferguson の
カンブリア方言の研究書
(1873 年刊)



かつて繁栄を誇った
リンディスファーン修道院跡
カンブリアはかつてこの修
道院の保護下にあった



Bewcastle 近くの公道
道に柵はなく、羊たちが
悠然と草を食む。この
光景は北欧と変わらない



ハドリアヌス帝の長城
に作られたローマの居
住用砦の復元図
日本人観光客用に、
日本語の解説まで書
かれている



ハドリアヌス帝の長城
の砦跡の一部
本物のもっと広い



Bewcastle Cross と教会 十字架の大きさに注目!

語と古北欧語由来の語とを発音で見分ける格好の例と言える。また thwaite は「区画、囲い地」を意味する語としてデンマークやノルウェーの地名にも多く見られる語で、カンブリアでは「農地」、やがて「村、教区」を意味するようになっていった。このようなカンブリア方言と古北欧語の関係は、地元の好古家 Robert Ferguson (1873) や言語学者 Thomas Ellwood (1895) が著した本で知ることができる。

カンブリアの北端 ボーカッスルのルーン碑文

ケルト語の Cymry (ウェールズ人) に由来する Cumbria (ちなみに同じ語に基づく Cambria はウェールズを指す) と呼ばれたこの地域は、英語の歴史の始まる時代 (5 世紀半ば) にはブリトン人が住んでおり、アングル人が北イングランドに住み始めた後、やがてノーサンブリア王国の覇権に飲み込まれていった。アングル人がキリスト教に改宗すると、東海岸のリンディスファーン修道院の影響下に置かれたが、地元の小さな教区教会による独自の文化に根ざしたキリスト教が

根付いたとみられる。

8 世紀末に始まったヴァイキングの襲来は、9 世紀後半には多くの北欧人の移住へと様相を変えていったが、アイルランドと海峡を接するカンブリアには、アイルランドのヴァイキング町となったダブリンを経由して多くのノルウェー人が侵入して来たと考えられている。ウェセックス王アルフレッドがイースト・アングリアにやって来たヴァイキングの王グトルムとの間で 878 年に交わしたウエドモア協約により、北イングランドのほぼ全域が北欧人の法律の通用するデーンロー地域になったとされるが、カンブリアでは、他の北イングランド地域とも少々異なり、ブリトン人、アングル人およびノルウェー人の融合する独特の文化が生まれた。今日まで残る石碑に刻まれたルーン文字や画像は、アングロ・スカンディナヴィアと形容すべき独特の意匠や、北欧文化が継承された模様を私たちに垣間見せてくれる。

イングランドの石碑は多くが砂岩^{さがん}で作られている。砂岩は重く、運ぶのは大変だが削り易い。しかしながら、近代以降の大気汚染による酸性雨の影響で、現在では屋内に移さ



現在の Bewcastle Cross のルーン文字の状態
酸性雨のために、もはやあとかたもない

Oswy (Oswiu) 王の息子 Alcfrith と書いてある! のかな?



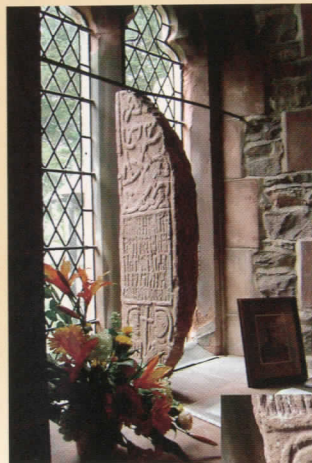
Bewcastle Cross に添えられた観光客用のパンフレット

ルーン文字復元トレースと、その解釈(「これは数ある解釈の1つに過ぎません」と但し書きが添えられている)



Great Urswick 教区教会

大きな木の茂みの向こうには石造りの教会の建物。カンブリアの教区教会のほとんどはこのような静かな町の教会だ



アングロ・サクソンのルーン碑文

Great Urswick の教会の窓辺に飾られている

LYL þi | S W(rohte)

Lyl this made
「Lyl がこれを作った」
これも文字のスペースが不足している



れた石碑以外は文字が溶け出している。将来のイギリスの文化保存にとっても大きな課題であろう。一刻も早く写真に収めなければ、永久に失われてしまう文字や図像がたくさんある。私も今から6年前に北イングランドのダラムを訪れた後に、ローマの皇帝ハドリアヌスが築いた長城に沿って一路カンブリアへと向かった。

カンブリア北部にある州都カーライルよりさらに北、スコットランドとの国境近くに、日本人がほとんど行かない歴史的名所 Bewcastle (ボーカッスル) という小さな集落がある。かつて城塞があったその場所には (castle という地名にその名残が偲ばれる)、イングランドで最も古いルーン文字の碑文の1つが立っているのだ。

ルーン文字とは、2世紀頃からゲルマン人が、北イタリアのエトルリア文字を元にして作ったとされる刻み文字で、石や金属、木片に刃物で切り込みを入れて記した。ちなみに、現代英語の「書く」という意味の write は、本来は「刻む、切り込みを入れる」という意味を持つ動詞だった。イングラ

ド人が祖先から受け継いだルーン文字の役割が分かろうというものだ。

さて、Bewcastle Cross と呼ばれるその十字架の石碑は8世紀前半に建てられた。その巨大な十字架の柱は、北イングランドのノーサンブリア王国をキリスト教化した王 Oswiu(670年没)の息子 Alcfrith と、彼の妃でマーシア王ベンダの娘キューネブルフを記念して建てられたとの碑文の解釈も、伝説的な二人の王の娘と息子の婚姻を記念するという、あまりに魅力的な歴史文脈ゆえに、今でも写真のような釈明付きで (!) 観光客に紹介されている。(この「俗説」を批判したオクスフォード大学のルノロジスト(ルーン学者) R. I. Page 博士は今年惜しくも亡くなられたが、今も草葉の蔭で怒っておられるだろうか。)

アズウィック村での アングロ・スカンディナヴィア・デザインとの邂逅

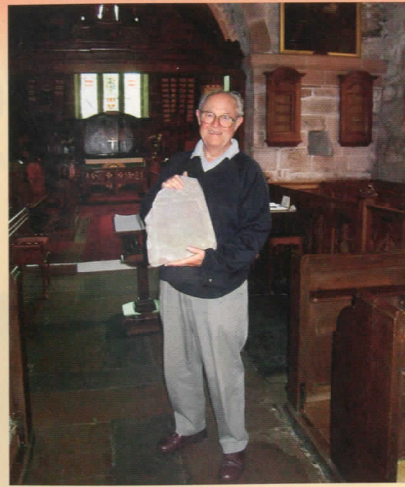
ここに描かれていたアングロ・サクソン人のルーン文字は今



Great Urswick 教区教会の
中世以来の洗礼槽



Collingwood による十字架の復元画



10 世紀の十字架の一部を持つアズウィック教会、
教区委員の John Imlach さん



+Tunwini setæ
æfter Toroh
tredæ becu
n æfter his b
æurnæ: gebidas þe
rs | au
| læ

R. I. Page, *An Introduction to English
Runes*, 2nd ed. Woodbridge:
Boydell, 1999, p.151, Fig.49
The Great Urswick Stone Runes'よ
り

+Tunwini setæ
æfter Toroh
tredæ becu
n æfter his b
æurnæ: gebidas þe
rs | au
| læ

“Tunwini set after
Toroh trede, his son;
Pray for his soul.”
レイアウトと語や改行箇
所とが合っていないのが、
おかしい

アングロ・スカンディナヴィアの 組紐模様

十字架の支柱。砂岩の表面が崩
れていて、まるでビートの合ってい
ない写真のようにになっている



ではまったく判読不可能である。けれど、Bewcastle から見
てカンブリアのちょうど反対側にある南部の Great Urswick
教区教会には、アングロ・スカンディナヴィアの意匠を持つ十
字架とともに、アングロ・サクソン人のルーン碑文が保存され
ていた。

今は教会の窓際に立っている、そのアングロ・サクソン石
碑には「Tunwini が、その息子 Toroh trede のために立て
た。彼の魂のために祈れ」と刻まれている。始めはきちんと
語句で折り返しているが、徐々にスペースが不足して、最後
は小さな文字を詰めて書き、それでも足りずに枠の外には
み出している。その下には、人物の体に **LYL þl | S W(roht)** 「リル
がこれを作った (ルーン文字を刻んだ)」とも書かれている。
ルーンを刻んだリルさん、あまり計画性はなかったようだ。

教会の洗礼槽の後ろに大きな絵が立てかけられていた。
W. G. Collingwood (1854-1932) による十字架の復元画だ
った。1876 年にオクスフォードを卒業したこの多才で卓抜な
頭脳の持ち主のことは、かの John Ruskin の秘書として覚

えている人も多いだろう。しかし、カンブリアに花開いた中世
前期のイングランドと北欧の間に通った文化的交流を、画家、
デザイナー、好古家、学者、小説家として現代に蘇らせたこ
とで、彼の才能は発揮された。カンブリアに残された石碑の
意匠の多くを記録し、独自のデザインの才覚を発揮して、復
元予想図をいくつも描き残してくれたのである。

Great Urswick 教会の Churchwarden に電話をし、
「Collingwood の復元図に描かれたこの十字架の現存する
一部を是非見たくて日本から来ました!」と伝えたと、やって
きた John Imlach さんは親切
にもこの貴重な遺物を倉庫か
ら出してきて、写真を撮らせて
下さった。カンブリアに独特の
朱みを帯びた砂岩に刻まれた
組紐模様はまさしく Cumbrian
Anglo-Scandinavian Design
であった!

